



TITLE:

ファウスト傳説とハイネ

AUTHOR(S):

杉山, 産七

---

CITATION:

杉山, 産七. ファウスト傳説とハイネ. 独逸文學研究 1953, 2: 22-35

ISSUE DATE:

1953-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186238>

RIGHT:

## ファウスト傳説とハイネ

杉山さんしち

ハインリヒ・ハイネがファウスト傳説をとりあげてゲーテと同じようにファウストを主人公とする悲劇を書きたい、と空想していたことは、一八二四年の秋、彼がゲッティンゲン大學生の身分でハールツ地方を旅行したとき、グイマルのゲーテを訪ねた時の、ある逸話がものがたつてゐる。しかしこの逸話はあまり信用できないという人もゐるが、時にハイネは三十一歳、七十六歳のゲーテの間に答えて、今わたくしはファウストを書いてゐます、と述べて、ゲーテを嘔然たらしめたものである。實際そんな談話が交されたかどうか、はつきり知るよしはないが、この頃たしかに彼はファウスト悲劇を書きたい一念をいだいていたらしく、一八二五——二六年には、その悲劇のうちのあつた草案が出来ていたと言われ

る。(ノルデルナイに靜養の時)。ちやうど「旅の繪第一卷」が出版されて讀者の注目を浴びた後で、すでに數年前「ラトクリフ」、「アルマンゾル」の悲劇をも作つてゐたからハイネ自身は己れの詩的才能に自信を抱き、大いに文壇に活躍しようと考えていた頃である。ファルンハーゲンに送つた手紙には、その空想を次のように述べてゐる、上述の紀行を彼に獻本した時、添えた手紙の中で。

「私の七絃琴の音がいくつ出せるか、それをあなたにお見せすることで足りるとは思いません。あなたはライエルのすべての音が一つに集められて大きい協奏曲コンツェルトとなることをお望みでしょう——それを私はあなたのために書く「ファウスト」に盛つてみるつもりです。なぜならば私が詩を作るための努力の一切を整理し、最善に導い

ていただいた人、その人以上に、私の詩作に對しより大きい權利を何人が持つでしようか。」

これに先立つ一八二四年にはハイネの友人ヴェーデキントの日誌の中に、ハイネのファウスト悲劇の構想が述べられてある。友人たちがゲーテのファウストを話題にのせると、ハイネはこう言つた、——「僕もまた一つそれを書くつもりだ。ゲーテと張り合うためじゃない。全くそうじゃない。誰でもめいめいファウストを書かねばならんよ。」それに對してヴェーデキントは、すでにゲーテのファウストが世間に出ているのに、あらたにファウストを書いたら、ハイネは讀者から悪く考えられよう、讀者は彼を高慢だと考えるだらう、と言つと、ハイネは、そんならファウストでない別の題をつけることにしよう、と、答えたという。

ヴェーデキントはハイネが書こうとしているファウストの構想を、更にくわしく聞いて、我が意を得た。彼の記したとおりを述べると、

「ハイネのファウストはゲーテのそれとはつきり反對のものとなるらしい。ゲーテの作ではファウストがいつも行動している。メフィストフェレスにこれをしろ、あ

れをしろと命令するのがファウストなのである。だがハイネの作ではメフィストフェレスを行動する原理たらしめようというのだ。ファウストを誘惑していろんな惡事をさせようというのだ。ゲーテでは惡魔がネガティーフな原理だが、ハイネの作ではポジティーフになる。

ハイネのファウストはゲツチンゲンの大學教授であつて、己れの學識にたいくつした人物となる。そこへ惡魔がやつて來て彼の講義に出席し、世間の様子をものがたり、この大學の先生を懷柔したため、先生はしだいに品行な人間になつてゆく。學生たちは、彼をからかいはじめ。「われらの教授先生は街をうるつく（女をあさるために）」とみんなが言う。「われらの教授はふしだらな人間になる。」とのうわさがいよいよひろまつたので、教授はゲツチンゲンを去らざるをえなくなり、惡魔と共に旅にでかける。

さて星の世界で天使たちが茶の會をもよおしているが、この會にメフィストフェレスが出席する。そしてファウストについての相談がはじまる。神はこれにはまつたく關係してもらわぬことにきまり、メフィストフェレスがファウストのことで天使たちと賭をとりきめる。メ

フィストフェレスは天使をひじように好むでいる。殊に天使ガブリエルに對する愛を、親しい友人の愛と、天使間には存在しない兩性の戀との間の、あいことなるようにえがきたいとハイネは考へてゐる。この茶の會は全曲を通じて舞台上に演ぜられる。

その終末については、ハイネはまだはつきりした考へはない。たぶん彼は、自ら高利貸のような人間になりはてたメフィストフェレスによつて、教授を紋首台につるそうと思つてゐるらしい。たぶんハイネは結末を全くつけぬつもりらしい。何故なら、それにより、本來これに屬してゐない多くのことをこの劇の中へ持ちこむことができる利益があるからだ。

このファウストは大部のものになるように、僕は思つてゐる。ただ例の茶の會を出すために筋をはさむことが殆んどできなくなるのじやないかと、僕も、またハイネも思つてゐる。……」

青年時代のハイネの空想、悲劇ファウストの完成は、ついに實現しなかつた。しかし、これより二十年へて一八四七年、彼はファウスト傳説をバレエのための臺本に

まとめる機會を與えられて、これを書きあげた。もちろんパリにおいて、彼の病氣がひどく悪くて、病苦に悩みつゝあつた頃だつたが、彼は依頼を受けて快諾し、大きい興味と熱情をもつて仕事にとりかかつたことは、この臺本の前には、讀者のためのしおりとなる緒言のせ、又後尾にはくわしい「註解」を加えて後にこれを出版したことで、推察せられる。

ハイネは、ドイツの民謡はもとより、傳承、傳説を深く好んで、いろいろ古書を愛讀していたから、ファウスト傳説をバレエ化することは、快心の仕事であつて、おそらく青年の頃の空想が思いだされたことであつたろう。しかし、二十年むかしの頃の悲劇ファウストの構想や腹案とは、ほとんど關係なきもののように、ハイネ自ら記してゐるように、傳説のファウストをひたすら忠實にバレエによつて表現しようと努めたのである。ハイネは言う、

「僕の表現方法の限界をいかながら越えることはできなかつたが、しかしその限界の内側で僕は男子としてなしろるところをなした。して少くともゲーテがけつして誇ることを許されない功績を僕は得ようと努めた。す

なわち、ゲーテのファウスト詩を読んで一般的に我々が缺けていると感ずるのは、實際の傳説に忠實に據つていない點、傳説の眞の精神に對する敬意、傳説の内にひそむ魂に對する尊敬が缺けている點である。——十八世紀の懷疑派の人人が（してゲーテはその生涯を終るまでこの一人であつた）感ずることも理解することもできなかつた尊敬の念なのである。この一點でゲーテはわがままを犯したわけで、このわがままな恣意は、審美的にも呪われうべきものであり、かつ最後には作者自身にたたつたものだ。

まことにゲーテの作品の缺點はこの罪過より生じたものであつた。何故ならこの傳説がドイツ民族の意識の中に生きつづけたのは、釣合<sup>ジッパ</sup>によるのだが、彼はこの信心深いシメトリから離れたために、新らしく自ら工夫した不信心な設計圖にしたがつてこの作品をけつして完成することができなんだから。もし四十年後に出版されたあの腰ぬけの「ファウスト」第二部を、全詩のしあがりだと考えようとしないうちに、この作は決して完成したものではなかつた。ゲーテは第二部でかの巫術師<sup>オカルティスト</sup>を惡魔の爪から解放している。彼を地獄におとさないで、踊る

小天使たちや、カトリック教のアモレットンたちに守られながら、天國の中へ意氣揚々として彼を送りこんでいる。して我々の祖先たちに髪の毛のよだつような恐怖をあれほど吹きこんだあの恐ろしい惡魔の協約は、たわいのない茶番のように終つてい——いなバレーのような結末だと言つてもよからう。

僕のバレーにはドクトル・ファウストゥスの古傳説の最も本質的なものが失われずに含まれている。そして一つの戲曲的全體に對するこの説話の主な契機を結び合わせるながらも、その細部の點でも、現存する傳説をきわめて良心的に守つたのである。この傳説は我國の市場で現に賣られている國民文庫本<sup>ナショナル・リブRARY</sup>の中にも、又僕の少年時代に見物したことのある人形芝居の中にもすぐ見あたるものだつた。……」

以上のことばで分るように、ハイネは人形芝居と、國民文庫本と双方に依つて魔術つかいのファウストをバレー曲の主人として描くことを試みた。そしてバレーの制約から、惡魔を女性の惡魔に變え、非常に踊の上手なバレーナたらしめた。このバレー臺本はごくもう短い筋書にすぎないが、次にその筋書を紹介する如く、我々日

本人にとつてはまことに變化の多い、多彩な、けんらん  
な、奇怪な空想の世界がめまぐるしく現われる。しか  
し、そこには空想だけのとりとめもない、幻のような、  
そらごとのほかない美しさの他に、人の魂をせつなく引  
く力、遠くあくがれをそる力強さが貫流しているの  
は、フアウスト傳説がドイツ人の大いなる、深い傳承と  
して傳えられてきたその力、強さのせいであろうか。ま  
た、ハイネの筆によつて、いちじるしく感覺的な場景が  
強く浮き出ている。感覺の尊重、肉の解放を唱えたハイ  
ネとしては、當然の結果であらう。我國で妖怪變化のた  
ぐい、あるいは魔法、魔術は、文學の世界で活動するも  
のはあまり多くはない。それに比べるとフアウスト傳説  
が廣い、大きい世界を、惡魔や魔法つかいによつてくり  
ひろげていることが、我々の感嘆を深くする。しかも魔  
法によつて展開される世界がドイツ人の理想の一斑を描  
いていることが、この傳説の強みと深い意義を永遠に失  
わぬゆえんであらう。

さてハイネはフアウストに對してどんな考えを抱いて  
いたか。中世の人人は偉大な精神を眺めると、かかる精  
神は人間のものでもなく、又神のものでもなく、惡魔と

協約を結んでいるところから生じたものと、思つたの  
だ。従つて偉大な學者たちは世間からは魔法つかい、妖  
術師だと思われ、恐れられた。すなわち、中世を領して  
いたカトリク教信仰が、學術を尊ばず、人間性を認める  
ことを妨害したわけだ。しかるにフアウストは惡魔から  
物事の知識のみならず、現實の快樂をも要求した。その  
上フアウストは印刷術を發明した人だとも信じられてい  
た（これはまちがつた俗信ではあるが）。そして彼は、  
嚴格な宗教の權威に反對し、個人の力でものを探究しは  
じめた時代に實際生存していた。すなわち宗教改革のの  
ろしが正にあらははじめた時代、教會の教義よりも、印  
刷術によつて廣く人々の手に行きわたつた聖書そのもの  
の眞理を探らうとめざめた時代だ。ハイネのことばでい  
えば、印刷術は我々からカトリク教の安心をもうばいと  
り我々を疑と革命の中へつきおとした——惡魔の力の中  
に我々をわたした、と言う人もあらう。しかし、知識は  
信仰に對して勝利をえたのだ。知識、すなわち理性によ  
る物事の認識、學術は、カトリク教に欺されて取り上げ  
られた快樂を、ふたゝび我々の手にもどしてくれよう。  
人間は天國で平等を得る資格があるのみならず、又現世

の平等をも與えらるべき資格も持つてゐることを、ついに我々は知つたのだ。

ドイツ民族自身が、このような學者ドクトル・ファウストにほかならん。精神の不十分さを精神でもつて理解するに及んで物質的な快樂を要求し、肉に昔からの權利を返そうとする、かの唯心論者にほかならん。——しかしドイツ人は神を精神の代表と考え、惡魔を肉の代表と考えるカトリク式文學の象徴にとられてゐるので、肉の復讐をかえつて神からのむほんだ、惡魔との協約だと、となえるのである。

ドイツ人そのものがファウストで代表されるものとすれば、宗教のくらやみの中をおぼつかなく歩き、のうのうと暮すことを望まないファウスト、學術、現世の權力、地上の歡樂を熱望するファウスト、一切を知らんとする、一切の能力と享樂とを欲するファウストが、現代の人々にとつても、深い魅力があろう、なぜなら彼等自身が今戰つてゐる戰が、こんなに素朴に分り易く傳説の中に描かれてゐるからである。今行われてゐる戰、それは宗教と科學との間の近代戰だ、權威と理性、信仰と思想、つつましいあきらめと不敵な快樂の欲望との間に始

まつてゐる戰だ。以上がだいたいハイネのファウストに對する考えである。

ハイネの書いたバレエ臺本の題は「デル・ドクトル・ファウスト」で、「舞踏詩」という註がつけてある。五幕に分けてあるので、順を追つてその筋を次に紹介しておく——

## 第一幕

ゴチク式の圓天井のある研究室である。書架、天體儀、地球儀、星圖、レトルト、ガラス器、人や動物の骨格などが壁近く並ぶ他に、巫術用具もある。深夜。ドクトル・ファウストは高い肘かけいすにかけつけてゐる。第十六世紀の學者風の服裝をして、その所作には、ぶきようさと勇氣、きこちない學者臭と反抗的な學者の自負とが感ぜられるが、劔を揮つて輪を描き、書物を抜くと、部屋は暗くなり、雷鳴と電光とが起る。彼は魔術を使つて、赤い虎を出現させる。次に出て来るのは、うわばみである。怪物は次々に消えて、ダンスの音楽とともに、バレリーナが、ふつうの紗と肉色じゆばん（トリコー）を

着けて出てくる。この踊り子が悪魔であつて、メフィストフェレスが男性とすれば、女性の悪魔をメフィストフェラと呼ぶべきであらう。彼女は魔法の杖で、室内の物を色々に變化させる。ファウストは地獄に住む怪物を見たがつて、彼女にそれを出現させてもらう。はじめ奇怪な形をしていたそれらの變化は、メフィストフェラの杖にさわられると、ことごとく可憐な踊り子たちになる。

しかしどの踊り子もファウストのお氣に入らないことが分ると、メフィストフェラは、壁の鏡のなかに、公爵夫人の冠をいたゞいた美女の姿を映し出す。ファウストは鏡中の美女を見て戀慕の情を起し、その前にひざまずくが、鏡中の美女はかえつて彼を嘲弄する。

メフィストフェラは又杖を振ると、美しい男性のバレエダンサーを呼び出す。この踊り子は鏡中の美女と意氣投合して嬌態を示すのでファウストはすっかり絶望する。メフィストフェラは男の踊り子を忽ち猿に變える。

彼女はファウストに羊皮紙の契約書を差出して、ファウストの血判を求める。ファウストは現世の快樂を得る代りに、天界の淨福を斷念する契約を行う。と同時に今まで着ていた學者服を脱いで、美しいバレエ服に着換え

る。メフィストフェラはファウストにダンスを教える。ファウストはすぐにダンスが上手になり、彼女とバ・ド・ドウ（二人舞踊）を踊る。巧妙な踊り手となつた彼は、魔法の鏡の中の美女から嘲笑を受けず、かえつて燃えるような愛の返しを受けたから、歡喜のために酔つた如くに踊る。やがて美女の姿は消えて、古典派のダンスのレッスンがつづけられる。

## 第二幕

宮殿前の廣場。公爵、その妃が廷臣や騎士、貴婦人にかこまれている。公爵夫人は、豐滿なうらわかい女性だが、第一幕の鏡中の女性と全く同じ人のようだ。夫人の左足の靴は金の靴である。

初めこの廣場では牧人劇が演ぜられるが、これは最も古風なロココ趣味のもので、優美だが氣が抜けてつまらぬ、無邪氣なみやびをたたえたものであるが、ファウストとメフィストフェラが登場すると、すぐ終る。二人はバレリーナたちを従がえ威勢よく現れて、公爵夫妻に会いさつするが、ファウストと公爵夫人とは昔會つたことがあつたように、互におどろく。公爵はメフィストフェ



ラをねんごろに迎える。男女の二組が互いに強い愛撫を交す。やがて公爵はファウストに向い、魔術の實演を所望し、ダビデ王が律法を納めたひつの前で踊る光景が見たいと言う。ファウストが杖を振ると、ダビデ王が出現し、又その護衛の者も現れて踊つて、一同の喝采を浴びながら消失する。

メフィストフェラとファウストは新にパ・ド・ドウを踊るうちに、彼女は公爵を、ファウストは夫人を誘ひよせ、四人の劇的カドリールが始められる。ファウストは公爵夫人の頸に惡魔のあざがあるのを見て、夫人の正體が魔女であることを知り、魔女の安息日にあいびきしようと言う。夫人はそれを承知しないが、はいている金の靴は惡魔の花嫁である印であつて、素性をかくしきれず、ファウストとの會合を承諾する。

ファウストは又魔法を實演して踊り子たちを第一幕に出た怪物に變化させ、大きく口をあけた地中へ火炎に包まれながら消失させる。その後この四人の男女は狂わしい踊りの中に、欲情を現わすが、夫人とファウストとの嬌態を見た公爵は思わす怒つて劔を抜いてファウストを刺せうとする。ファウストはこれを防いで魔法の杖で公

爵を打つと、公爵の頭に大きいしかの角が生える。二人が相對するうちにラッパの吹奏が起り、甲冑をつけた騎士の一隊が現れる。公爵の家來たちがこれに身がまえるうち、ファウストとメフィストフェラとはそれぞれ黒毛の馬にまたがつて空中はるかに飛び去る。騎士の一隊も同時に消えて幕がおりる。

### 第三幕

魔女安息日の夜景。平坦な山頂。人間の顔を持つ黒い牡山羊が中央の壇にすわつていて角の間に火のついたろうそくを立てている。後景は重り合つた高山の峯が連りこの山の上には第一幕で登場したことのある地獄の怪物どもが見物人として控えている。舞台兩側にはラムプをつつた樹が並び、その木の上には鳥の顔をした樂士たちが、妙な絃樂器、吹奏樂器をたずさえて止まつている。多勢の舞踏が始まつている。假裝舞踏會の觀を呈して衣裳は各國の、又各時代の幻怪なものであるが、美感を損ずることはなく、怪物の醜惡な印象は、架空的な豪華と、現實の恐怖心によつて緩和されるか、あるいはきれいに拂拭される。牡山羊の尻の前に一組の男女がたいま

つを手にしてひざまずいて尻を接吻する。續々と新しい客が、ほうきの柄や、堆肥用フォーク、汁しやもじに跨つて、或は狼や猫に乗つて空中を飛んで来て、待ち迎えている戀人とたわむれる。次に公爵夫人が黒い大ころもりに乗つて飛んで来る。出来るだけ肉體をあらわそうとした服装で、右脚の靴は金の靴である。夫人はファウストを見つめる。ファウストもメフィストフェラと共に黒馬に乗つてここへ飛行して來たのである。彼は美々しい騎士のいでたちである。メフィストフェラはドイツの貴族令嬢の如き乗馬服を上品に着ている。彼女も亦踊の相手を見つめるが、これはスペイン・スタイルの黒のマント風の服と、ベレー式の帽子にまつかな鳥の羽をさした、長身の貴族である。

ファウストと夫人との踊は、純粹な情熱、はげしい愛情をしだいに強く現わしていくのに反し、メフィストフェラと相手との踊は、うそで固めた情事、自己を嘲る肉情を發揮したもので、二組の踊の對照が著しい。彼等も亦たいまつを手にとり、山羊の尻に接吻し、やがてロンドに加わる。このロンドは、ダンサー達が互いに相手に背を向けて、決して顔を見合わず、絶えずそつぽを向

いている踊り方なのである。  
ファウストと夫人とはロンドの列から離れ、戀に痴れ狂つて退場。ロンドも終る。

次に修道僧と修道尼が大勢登場し、突飛なポリカを踊り出す。ファウストと公爵夫人が又現れるが、今度は明らかに彼は彼女を嫌い斥けて面には惱亂の色が見える。黒人が三人で夫人を捕えて夫人の夫、サタンの許へ連れてゆく。かの牡山羊は座をおりて夫人とメヌエツトを踊る、これは緩慢な、固苦しいステップで行なわれ、山羊の顔には堕ちた天使のような悲しみと、倦怠した君主の深いいくつさが浮ぶ。夫人は絶望したまゝ退場し、あとに残つたファウストは、再び現れたメフィストフェラに向い、夫人を指して何か夫人の恐るべきことを語らしめる。ファウストは、純粹な美しきもの、ギリシア的調和、ホーマアの春の世界に住む非利己的に高尚な人物に對して無限のあくがれを覺えた。それを察したメフィストフェラは魔法の杖で地を突きながら、スパルタの女王ヘレナを地中からしばらく出現させる。ヘレナこそ、學者ファウストの、古典的理想を熱望する心の求めて止まぬものであつた。メフィストフェラと彼とは馬に乗つ

て飛び去る。

この時姿を現わした夫人は、戀人ファウストの逃亡を知つて絶望し、氣を失つて伏す。再び魔女のロンドが始まるが、小さい鐘とオルガンの讃美歌がとゞろいて止む。黒い牡山羊が突然燃え上つて焼かれる。幕が下りてからも、惡魔のミサの恐ろしい茶番めいた演神的な調べが絶えない。

#### 第四幕

多島海上のある島。青い海と青い空が見え、太陽の光がさんさんとふりそそぐ。草木もホーマアの夢想したようなギリシア的美しさを有している。瀧。右手にヴェーヌス・アフロディテの祠堂があつて、祀られているヴェーヌスの像が見える。若者たちは白の正装、處女たちは軽く端折つたニムフ風の衣裳をまとい、バラとミルテの花で頭を飾り、或は笑い興じたり、或は祠堂の前で禮拜などを行つてゐる。

幻怪な、ゆううつな第三幕の光景とは全くことなり、ギリシア風の明朗さ、神々の甘露の如き平和、古典的平安がみなぎつて、霧のかかつた彼岸の國、歡樂と不安と

の神祕なおののき、肉體から解放された精神の持つ超俗的な忘我的狀態、——そういうものを思わせるものはない。回顧的な悲哀を浮べない、又空しい憧憬を抱くことのない、現實的、彫刻的淨福にあふれている。島の女王は詩の最もうるわしき女性ヘレナで、ヴェーヌスの祠の前で侍女と踊つてゐる。周囲の景物に調和したおちついた清淨な、おごそかな踊り方と姿勢とが示される。

ファウストとメフィストフェラは黒い馬に乗つて飛來した。二人は今までの悩みや、狂亂を脱却して、この美と高貴の眺めに接して、心が洗われるような思ひをする。ヘレナは三人を歓迎した上、我が許に住んで靜かな幸福な生活を送るようにする。二人はそれを承諾して、着ていた中世時代のロマンチックな衣裳を、はでなギリシア服にかえ、ヘレナを交え、神話的な三人舞踏を踊る。

ヘレナとファウストは王座に坐し、メフィストフェラは、テュルズス（バッカス神の杖）と手太鼓とを持ち、バッカスの巫女となり奔放に踊り狂う。ヘレナの處女たちもこれに和し、髪につけた花を引抜き、髪をふり亂して、バッカスの巫女となつて踊る。若者たちは柝と槍を

持ち、狂亂する彼女を追ひ出しながら、戦いのまねごとを行ふ。

これはいわば雄壯な田園曲であるが、更に古典風な諸謠曲を挿んでもよい。それは白鳥に乗つてくる一群のアマレットン（つばさを持つた愛の小童神）を登場させ、

槍と弓を持たせ、合戦の踊を踊らせるのだ。しかしアマレットンの群は、公爵夫人が大こうもりに乗つて突如飛來するので、驚いて飛び去る。夫人はファウストを責め

メフィストフェラを脅迫する。夫人の怒りと、新たに始められたヘレナの處女たちの喜びの合唱とが對照する。夫人は魔法の杖を振ると、明るかつた天はくらくなり、

雷鳴がとどろき、紫電がひらめき、海は荒れてつなみを起す。恐ろしい變化がおこつて荒廢破壊の光景となり、

女王ヘレナも骨ばかりにやせ衰え、踊り子たちも骨だけのうしろれいと化しながらも、ロンドはつつけられていく。ファウストは己れの幸福がむさんにも粉碎されたのは

夫人すなわち嫉妬に狂う魔女の返報によることを知つて憤り、劍を抜いて夫人の胸を刺す。メフィストフェラは魔法の馬を引き出して、ファウストとともに逃げることをすすめる。海の水はしだいに押し寄せて、人々はみな

水中に漂う。が踊り子たちは、それには氣がつかぬらしく踊りつづける。明るいタムプリンの音は、彼女らの頭が水中に沈み、幸福の島が水中に沈んでしまふまで、消えない。

## 第五幕

ゴチク式伽藍の前の廣場で、伽藍の正面玄關が後方に見える。兩方に剪定したぼだいじゆ。樹下には十六世紀のオランダ風な服を着た市民たちが酒宴を開いている。射擊競技會も行われ、見せ物小屋、樂隊、人形芝居、道化師など、すべてにぎやかな教會の大都市の趣き。

射擊競技の優勝者がきまると、祝勝の行進が始まる。ビール製造者の人形（鈴をつけた王冠をかぶらせ、腹と背には金板の楯をつらせてある）、太鼓たたき、笛吹き、旗持ちのあとから、射擊會員がつづいて行進し、市長夫妻と幼い娘とにあいさつする。

らつばの音と共にファウストは二頭立馬車に乗つて來た。彼は金のささべりをとつた、まつかな山師醫者服を着た博學なドクトル先生になつて現れ、その馬車の前から彼同様けばけばしい山師のよそおいでメフィストフェ

ラが歩いて来る。彼女はトランペットを吹いて、人々を寄せ集める踊りをする。群衆は殺到してファウストから薬を分けてもらう。ファウストは尿を検査したり、齒を抜いたり、かたわを立ちどころに直す奇蹟を演じたりする他、人々に妙薬を分ける。これを飲んだ射撃の優勝者にも市長夫妻にも、たちまち利目が現われ、メフィストフェラと共に踊りはじめる。

人々の混雑している中をファウストは市長の娘に近づいて、娘のあどけなさ、しとやかさ、美しさに魅せられて、自分の戀慕の思を娘に打ち明ける。娘の親たる市長夫妻にも求婚の許可を求める。娘は承諾する。彼女とファウストは花嫁花婿となつて、市民的な踊りを踊る。ファウストはついに靜かな生活の中に家庭の幸福を發見し魂の満足をえた。疑惑と苦痛の享樂は忘れられて、教會堂の塔の上の金色の風見のとりのように心からの淨福のために輝いたのである。

婚禮をとり行ふべき花嫁の行列ができあがり、教會に向つて行進を起したとき、メフィストフェラは嘲弄を浮べてファウストの前へ出、ここを去り彼女について來いと命ずる。ファウストは怒つて反抗する。メフィストフ

エラは魔法の力で、急に白晝を深夜に變じ、恐ろしい風雨を起す。人々が教會に逃げこむと、堂内から鐘とオルガンが鳴りひびく。しばらくはこの音と風雷雨電とがせりあう。ファウストも教會に逃れようとするが、地下から現れた黒い大きい手が、彼をはばむ。メフィストフェラはふところから羊皮紙を取り出した。ファウストが昔その血で署名した契約書である。契約の時期は經過し肉と魂とは地獄に歸すべきであると、彼女は勝ち誇つて示す。ファウストはけんめいにそれを拒み、かつ歎願をくり返すが空しい。彼女は嘲笑を浮べて彼のまわりを踊りまわる。地面に穴が開いても、冠と笏をもつた地獄の怪物どもが出現する。彼等もロンドを踊りながら、ファウストを冷笑する。メフィストフェラは大きな蛇に變化してファウストに巻きついて締め殺す。この一群は火炎に包まれながら地中に沈んでゆく。大伽藍からとどろく鐘聲とオルガンの調べはキリスト教の祈りを促すのであつた。

出版するときこの臺本のうしろへ添えられたハイネの

解説は「惡魔、魔女及び文藝の珍らしい報告」であつて長い間彼の特に愛着をもつて研究したドイツの口碑、傳説、民間信仰を、ファウスト傳説を中心に記したもので、彼の同種の論文、「妖<sup>エレメンタルガイスト</sup>精」、「追放の神々」、又默劇「女神ディアナ」と共におもしろい讀みものである。「ドクトル・ファウスト」の筋は上述したとおりであるが、彼の説明に従つてこの臺本を理解するに役立つかと思われる點を二、三あげておく。

惡魔がメフィストフェラと名づけられてバレリーナとなることは、上述の通りであるが、これは彼の創案ではなく、傳説を守つてしたことであると彼は述べている。その他猿の變化が出ることや、惡魔の情夫（公爵夫人）が金の靴を片方だけはいっていることなども、すべて傳説に従つてゐるのである。

ファウスト傳説の中に美女ヘレナが現れることは、意味深い。ヘレナは、この傳説の成立した時代を特色づけると共に、この傳説の深い意味を説明するものだ。ギリシアのヘレナ、美とみやびの永遠の理想が、ある日の朝ウィッテンベルクでファウストの妻となつてかشيづいたことは、突如としてドイツ國民の胸の中に浮び出たギリ

シアとギリシア主義とに他ならぬ。史的に實在したファウストも、傳説のなかの彼も、ギリシア主義、すなわちギリシアの學術、藝術をドイツにひろめようと熱中したあの人文主義者のひとりだつた。當時この宣傳の本據はローマであつて、ここでは高位の司教たちも古い神々の禮拜を始めた。この時代は復活の時代、古代の世界觀の再誕生の時代、すなわちルネサンスの名まえで正しく言い現わしえた時代だつた。この時代はドイツに比べてイタリアで容易にその全盛と支配權とに達することができた。ドイツでは、當時行われた聖書の新しい翻譯によつて、福音のルネサンスとも稱すべき、ユダヤ精神の再誕生が、偶像を破壊するほどの熱狂ぶりで、時代に對抗した。人類の二冊の偉大な本——一千年のむかしには互いにかたきどろしと考へて争ひ、やがて戦ひ疲れたように中世時代には舞臺から退場してまつたく姿を見せなかつた二冊の本、——ホーマアとバイブルが第十六世紀のはじめにふたたび晴の戦ひに登場したのは、いかにもふかしぎなことと申すべきである。

ハイネによれば、唯心論的な古代カトリク教の禁欲に對し、實在論的な、感覺主義的反抗を描いてゐるところ

がファウスト傳説の本來の眞意なのである。そしてこの感覺主義的實在論的な生命の喜びそのものが、思想家たちの心の中に生じたのは、彼等がギリシア藝術、學術の記念物を突然識るに至つたこと、彼等がプラトンやアリストテレスの原典を、又ホーマアを讀んだことによるのである。(傳説のファウストはこの二人の哲學者及びホーマアに深く通じている。) このように考えればヘレナの出現がファウストにとつて重要な契機を與えたわけだから、ハイネはゲーテのファウスト第二部のヘレナについては感嘆のことばを惜しまない。ヘレナは「第二部のいちばんよいところだ。いや、唯一のよいところである。この寓意的な、迷宮風の荒野の第二部の中で、突然高い臺座の上に、圓滿具足のギリシアの大理石像が立ちあがつて白い眼で我々を眺める。そぞろに悲しい氣持ちになりそうな、異教の神らしい美をたたえて。」

ああ、ヘレナの姿を見てなぜドイツ人は悲哀をおぼえるのか。彼等の理想であつて又魂の故郷の女王さまであるからである。ドイツ人の永久にみたされない郷愁がヘレナに結晶しているからである。ハイネがバレーの一幕全部をヘレナのためについでしたのは、上に述べたよう

なわけだ。

又ヘレナのいる場所がある島に定めたのも、彼の創案ではない。すでにギリシア人がこの島を發見してゐると、ハイネは言つてゐる。アキレスの廟がある故アヒレアという名の島で、ドーナウ河口に近いところにあると言ふ。英雄アキレスは墓の中からよみがえつて、トロヤ戰役に参加した名將だちと共に島を歩きまわつてゐるが、この中にはスバルタの花ヘレナもまじつてゐる。勇氣と美とは、俗衆と平凡の徳の喜びのために早くはなかく滅びる運命にある。しかし寛大な詩人たちは勇武と美とを塚穴の中から救ひ出し、花もころもしぼむことなきある幸福な島の上に運んでやるのである。

これが第四幕のハイネの註であるが、この幕で戰爭の踊りが踊られる理由も明らかとなる。

(この報告は昨年と今年と、京大分校のゲルマニストたち七人と共に科學研究費の交付を受け、*Faust als Charakterbild des deutschen Menschen — eine genealogische Untersuchung — Der faustische Mensch als deutsches Schicksalsbild* の題目で研究されつゝある仕事の報告のひとつである。)